

# 国内研修報告書

## 〈動機〉

現在漫画村をはじめとした海賊版が出回り本の購入が少なくなっている。そのほかにもスマートフォンの普及によって電子書籍の需要も高まってきてますます本の購入が酸くなってきたいて、ある書店では本の売り上げが足りず電子書籍でカバーできたという話もある。そして、実際に書店は1日に1店舗なくなっているといわれているほど書籍の需要は低くなりつつある。その中で Amazon や楽天で古本販売においてシェアナンバー1を誇っているバリューブックスに興味を持った。また企業的な部分だけではなく NABO（ブックカフェ）やブックバスといった地域や人に貢献するという面でさらに興味を持ち来年度からある専門演習を決めるきっかけとなると思い訪れた。

## 〈行程〉

NABO（ブックカフェ）を中心としたバリューブックスに関連した場所（巨大な倉庫や図書館ラボ）を訪れた。また今回は古本を通じての地域貢献という意味で今回長野県上田市が行っている地域活性化をすすんで行っている場所を訪れた。

## 〈効果〉

今回私は現在自分自身が book off に勤めていることもあり古本販売についてはなじみがあり学ぶことも被ることも多くあった。しかし、book off もネット販売しているのにも関わらずなぜ古本販売においてシェアナンバー1になれないのかがとても不思議に思っていた。また、book off 自体検索してみるとすぐに赤字と出てくる。同じ古本販売であるのになぜこうも違うのかそして自分が働いていてなんでこんなことをするのであろうかと疑問に思っていることも多くある。まずこの2つの会社を対比してみるとバリューブックスは NABO や図書館ラボ、ブックバスを除いてはすべてネット販売仕入れもすべて送ってもらう（送料冊数によって無料）そして book off はすべてお客さんに持ってきてもらい店頭や一部ヤフオクなどで出品している。昔はインターネットの普及率も少なくネット通販といえばごく一部の人にしか使えなかった。しかし、今ではスマートフォンが普及し大人から下は幼稚園生まで多くの人がインターネットが使えるようになった。気軽に誰でも使えるという部分でやはりバリューブックスのほうがアクセスもしやすく本が一つに集まっているので探し

やすい。(book off は店舗によって分かれているためほしい本が必ずその店舗にあるとは限らない) 古本の販売や仕入れ方法だけではなく社会貢献においてもバリューブックスは非常に興味深かった。例えばチャリボンとって寄付をお金ではなく本でしようという試みだ。いらなくなった本を売りその代金は自分(顧客側)が指定したNPO法人などに寄付することができる。これは寄付をするにもお金だと少し気がひけるといふ人を対象にして新しい寄付の仕方である。確かにお金を寄付するといふとどのくらいしていいものか困ることもある。しかし、本を売ることによって自分はいらぬものがなくなりついでにNPO法人などに寄付できるという一石二鳥といふことで利用する人は多そうだ。

また中古販売となるとどうしても売れぬものが出てきてしまう。そんな本のためにBOOK FOR GIFT といふ病院や幼稚園といふ教育施設に寄付をしている。本は倉庫で眠っているものやただの飾りではないといふことで多くの場所に寄付されていて現在長野県や東京都合わせて40か所のも場所に本を寄付したそうだ。Book off では売れぬと分かるとリサイクル(新たな資材に変換する)してしまう。リサイクルすることは決して悪いことではない。バリューブックスでも実際にどうしても水にぬれていて文字が見れなかつたり破れてしまっているものは同じくリサイクルしている。しかし、本は本として価値があるのだとこの活動をきいて思つた。本は紙の集合体でできているのではなく本は紙に書かれている文字(物語)によって成り立っているのだと思つた。さらにブックバスや図書館ラボといふ本がない人のためにバスで本を届けたり今後の図書館について考えていてバリューブックスはどこまで考えているのかと思つた。そして今回NABOや長野県上田市を案内してくださつたバリューブックス取締役・准認定ファンドレイザーである鳥居さんに直接聞いてみると「全部がステイクホルダー(利害関係者)」と話していた。確かに顧客に買ってもらふためにはその人の経済状況が最低基準保たれていないと本を買う余裕など生まれてこないし、そもそも地球自体がなくなってしまうと買う買わぬの問題ではない。顧客から始まった関係するものすべてがバリューブックスにとってのお客さんであるのだと分かつて本を媒体として相手(顧客)にしているものは壮大だと思つた。鳥居さんが最後に「まだどれもが発展途上であつてこれからたくさんの人に本が届くようにたくさんの方を助けていきたい」とおっしゃっていた。今現在でも多くのお客さんを相手にしているのにも関わらずまだ発展途上といふ鳥居さんに驚くとともにバリューブックスのコンセプトである「本屋が変われば世界が変わる」は案外もうすぐなのではないのかと今後のバリューブックスがどのようなこと起こすのかが非常に楽しみだと思つた。

また、バリューブックスとは別に長野県上田市についても勉強をしてきた。長野県上田市は

真田幸村のまちとして有名であり上田城は春桜が満開になると観光客もおおく訪れる。新幹線もとまることから東京からの交通の便が非常によく別所温泉もすぐ30分ほどにありよい場所にある。そんな長野県上田市にあるまちなかキャンパス（学生が訪れやすいようにWi-Fiやプロジェクター、ホワイトボードがあつたりほぼ毎日大学生や地元の人に向けて講座を行っている）に訪れたりほぼ主婦の方で構成されている会社があつたりまた今回自分たちが泊まった犀の角という宿は基本的にバックパッカーの人が使う宿となっているがその傍ら映画館も併設されており2日目の時に自分たちは見るができなかったが映画祭&演劇祭（参加者には地元の大学生をはじめとした学生が多くみられた）を開催していた。このように、地域の人たちをうまく巻き込みながらも観光客といった外から来た人でも気軽に楽しむことができるものが多くあつたり、主婦の方中心とした会社のように県外や市外に人が離れないように雇用形態を変えていることからバリューブックスをはじめとして流行にのることや現在の状況がわかっている人が多くいてそれに賛同する人もまた多くいてなにかを挑戦するにはいいまちだなと思った。さらに駅周辺やあたりを見てみたのだがチェーン店があまりないのだと気づいた。すべて地元の人が自分で稼いでいると知りチェーン店に頼ることはとても簡単で安定しているがそれと同時にそのまちにあるもの（景観や人間性、地元の人とのかかわり）が薄れてしまうのではないかと考えていたので実際に地元にあるパン屋さんなどに行ってみたり1番古い映画館を訪れてみたりとガイドブックには決して乗っていない場所が次々と出てきてとても面白かった。

〈フィールド調査を終えて〉

今回はNABOやバリューブックスだけではなく地域や人、さらには本のかかわりを多くみることができた。それもバリューブックスが本と顧客だけではなくすべての人を巻き込んでいるからだと思った。いままで自分が見てきた企業は商品と人がつながっているだけでそのほかにはあまり目を向けていないのではない企業が多くあつた。だからこそ新鮮だったし学ぶことも多くあつた。まだ早い話だがこれから就活するのにあたって企業の中に入る人として楽しく働ける企業を探そう、また大企業＝良いという自分の偏見が外れたいいフィールド調査になった。

〈参考〉

バリューブックスホームページ

<https://www.valuebooks.jp/>